

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 4月 27日現在

機関番号：62501
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2009～2011
 課題番号：21520835
 研究課題名（和文）異業種間の職人における技術の伝承と応用性に関する研究
 研究課題名（英文）A Study on Relations and Application of craftsmen's Techniques among Various Industries
 研究代表者
 青木 隆浩（AOKI TAKAHIRO）
 国立歴史民俗博物館・研究部・准教授
 研究者番号：70353373

研究成果の概要（和文）：本研究は、異業種間における職人技術の関係を解明することを目的としている。一般に、職人の技術は他社のみならず、同僚に対してもしばしば秘匿とされている。そのため、同じ業界であっても、製造技術は多様である。一方で、変え難い伝統的な技術が存在する。その技術が消滅する原因は、原材料が入手困難になることや、関連業者が淘汰されることなど、外的な要因による。そして、それらを通じて、職人の技術は大きく変化すると考えられる。

研究成果の概要（英）：The purpose of this study is to clarify the relations of techniques of craftsmen among various industries. Generally, the technique of the craftsman is often considered to be concealment for not only other companies but also the co-worker. Therefore, their techniques are various even if it is the same industry. On the other hand, parts of their techniques are hard to change. Their techniques are cut off to be difficult to obtain raw materials and to be reduced the associated supplies.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学，文化人類学・民俗学

キーワード：伝統産業，技術伝承，技術変化，道具，ロクロ

1. 研究開始当初の背景

研究代表者の青木がこれまでおもな研究対象としてきた清酒製造業では、数年前から木桶での仕込みが見直されつつあるが、大桶のタガを締められる桶職人は全国でもわずかしかなかった。これは、桶が珓瑯のタンクに代替されたことが主な原因としてあるが、他にも良質の杉材が手に入りにくくなったことや大桶を利用してきた酒造家や醤油醸造家、味噌醸造家の数と生産量が減少してきたことも関係している。

良質な杉材が入手困難となり、酒造家や醤油醸造家が減少すれば、それらに多くの製品を供給してきた樽師も打撃を受ける。また、材料の入手困難に対しては、陶磁器業が代替品を提供し、ライバルとなった歴史がある。さらに桶師が減少すれば、その道具を作ってきた職人が影響を受ける。例えば、桶を作るには内鉋や外鉋が必要であるが、需要が少なくなれば、まず鉋の台を作る職人が減少する。すると、鍛冶屋がそれらを作るのが難しくなっていく。

このように1つの分野の職人技術は他分野に大きな影響を与えており、連鎖的に変化していく。そこで、職人の技術について研究する場合には、当該分野だけを取り扱うのではなく、他分野との関わりから考察する必要があると考えたのが、本研究課題を立ち上げた動機であった。

2. 研究の目的

本研究は、伝統産業の技術が近代化・工場化の進展するなかで、位置づけをたえず変化させていく様子を近現代の長期的な視野から明らかにするものである。なお、変化の原因は、必ずしも当該産業の内発的な動機に限られない。むしろ現実的には、直接的な取引関係や技術提携の有無に関わらず、異なる産業が相互に影響しあって、技術変化の大きなうねりを生み出していることが少なくない。そこで、本研究では研究対象を1つの業種に限定せず、ある技術が存続・衰退・復活する様子を他業種との関連から明らかにする。

具体的な内容としては、研究代表者の青木がこれまで扱ってきた酒造業を事例として、さまざまな雇用の発生と技術伝承の仕組み、さらには他業種への影響を長期的なスパンで調査する。次に、この研究視角の応用性を確認するため、酒造業と同様に伝統的な手作りと工場化が共存している業種について、同じ視点からの分析を試みる。

これらに関する業種は少なくないが、本研究ではとくに轆轤をめぐる職人のネットワークや技術伝承の仕組みに力点をおく。その理由は、轆轤が本来正確に円形の製品を形作るための道具であり、その意味で旋盤を用いた工場化への連続性を有するにも関わらず、今もなお陶磁器や漆器、文房具といったさまざまな分野の手作りに用いられているからである。以上の比較により、異業種間で相互に影響しあいつつある職人の技術とその位置づけが、長期的には変化しつつも共存していく様子を明らかにできると思われる。

なお、本研究の特徴的な成果としては、①モノを通じて、異業種間における職人の直接的・間接的な相互関係を明らかにできる、②家族経営や企業経営の原理とは異なった側面から、職人の雇用が発生している要因と、彼らの技術が変化しつつ伝承されている様子について、共通の原理を見いだすことができる。

3. 研究の方法

本研究の目的に対し、研究代表者の青木隆浩が清酒と陶磁器、さらにはそれらに関連した産業について、研究分担者の小池淳一が木工品、文具とそれらに関連した産業についてそれぞれ研究をおこなう。研究方法は、フィールド調査を中心としつつ、文字資料やモノ

資料、統計データ、映像、写真の分析・加工を主とする。

その際、血縁や師弟関係、公設試験所の役割といった人と人との関わりに注意しながら、同時に原材料や使用する道具、隣接する分野との競合関係についても調査する。そして、最終的に技術の伝承と変化がどのような要素のもとに起こっているのか、その結果を集約していく。

4. 研究成果

○平成 21 年度

まず、青木が栃木県の清酒製造業を事例として、酒造りと酒造道具の関係について研究をおこなった。酒造りは、これまで南部杜氏や越後杜氏といった蔵人集団が冬の季節出稼ぎとして担ってきたが、近年急速にその数を減らしている。その原因は、おもに地元における就業機会の増大と清酒製造業の厳しい経営状況にある。代わりに、清酒製造業では経営者家族や地元の通年雇用者が酒造りを担うように変わってきている。

この経営者家族と地元の通年雇用者による酒造りは、勤務時間や人員配置、酒造道具・酒造機械の選択にも大きな影響を及ぼしている。これについて調査を行った結果、酒造家が通勤型の酒造りを実現するため、8時から17時までの勤務時間に合わせて酒造工程を組み直し、それに必要な酒造道具・酒造機械を導入している様子を確認できた。

また、青木は陶磁器業の技術変化について調査をおこなった。とくに近代において急激な大量生産化を実現した美濃焼と瀬戸焼を対象として、道具の製作や絵付けの方法などについて調査をした。それらと比較対照をするため、常滑焼での聞き取り調査や壺屋焼、益子焼、有田焼の産地見学など幅広く主要な陶磁器産地の調査をおこなった。

一方、小池は大阪、高知、長崎、福岡をおもなフィールドとして、筆記具の製造現場を調査した。そこでは、職人が作りたい筆記具に合わせて道具を製作し、その道具が必ずしも師弟の間で継承されていない様子が注目される結果となった。

○平成 22 年度

まず、青木が昨年度、栃木県で撮影した酒造りの映像記録を用いて、南部杜氏や越後杜氏といった従来型の蔵人集団と2006年に新設された下野杜氏の製造工程と分業形態を比較検討した。その結果、蒸米・麴米の混ぜ方や櫛棒の回し方、五感の使い方などに違いがあることが判明した。やはり、清酒製造の教本に書かれていない点については、先輩杜氏の技を見て学ぶことが必要だとあらためて感じた。この映像は、歴博映像フォーラム5で公開した。

また、青木は陶磁器業の技術変化について

も引き続き調査をおこなった。とくに大正時代から昭和 30 年代にかけてデザインを大きく変え、民芸ブームへと至った壺屋焼と、それまで汽車土瓶や山水土瓶、甕などの日用雑器を主要製品としていたのが、濱田庄司の移住によって多くの作家が集まる場へと急激に変化した益子焼、さらにはこれまで有田焼ブランドとして販売されてきたが、近年独自の産地ブランドを強化している波佐見焼について調査をおこなった。さらに、多治見市で美濃焼の窯道具や製品変化についても調査した。

一方、小池は甲府をおもなフィールドとして、筆記具の製造や修理方法について調査した。その過程で、製造や修理に使っていた道具類の寄贈を受け、博物館に収蔵することとなった。そこで、これまでは製造現場での観察と聞き取り調査が主体であったが、その後は道具そのものを館内で詳細に調査できるようになった。

○平成 23 年度

栃木県清酒製造業については、現地在震災の影響を受けたため、わずかな調査にとどめた。少し時間をおいてから調査を再開したい。その代わり、非常時の企業行動として、汎用性のある技術は、従来のやり方にしばられにくい合併企業や後発企業にこそ受け入れやすいのではないかという推論を立て、それらに関する資料の収集とデータの整理をおこなった。

陶磁器業については、轆轤の使い方と製品の代替性という 2 つの局面から、壺屋焼と波佐見焼をおもな対象として調査をおこなった。製品を見れば轆轤の回転がわかるという指摘がある一方で、手作りの雰囲気を出すためにあえて製品に轆轤の回転による筋を入れるという話も聞いた。いずれにしても、轆轤の技術は手作り感と産地の特徴を出すための重要な要素となっている。製品の代替性については、桶・樽を典型として、機能やコストの合理性よりも原材料の質と量、規格化、あるいは流行に左右される傾向がみられるため、単なる技術変化にとどまらない状況を広く考察する必要性を感じた。

その桶・樽は、醸造などの生産道具として用いられる場合、良質の材と極めて高度な技術によって作られるため、製造コストに大きく影響する。このため、大正時代後半から外注と内製のコスト、産地ごとの木材の材質などが厳しく比較されるようになった。これに関する調査は、おもにヤマサ醤油株式会社でおこなった。

また、代替品が安く大量に生産される中、伝統的な製品が作られ続けている例として、三条の矢床と喰切生産の現場を訪ねた。矢床はラジオペンチ、喰切はニッパーと競合しているが、前者は宝石の加工業者に向けた繊細

な動作を可能とするため、後者はこれまでの漁網や針金からアルミサッシや皮革など用途を広げることで需要を確保していた。

一方、小池は甲府をおもなフィールドとして、筆記具の製造や修理方法について調査した。また、これに関する資料を積極的に収集し、分析をおこなった。結果として、3 年間で製造現場での観察と聞き取り調査、文献資料と製造道具の収集と分析といった多様なアプローチで調査をおこなうことができた。○3 年間を通じて

職人技術の伝承を中心として研究を進めてきたが、兄弟や師弟関係であっても案外個人差が大きく、最終的に顧客から求められる質の商品ができれば、その製造過程にはあまりこだわらないという事例を数多く拝見することになった。そして、同業者であってもお互いの作り方を全く知らないということも多い。その一方で、業界全体で長く用いられてきた技術にはそれだけの理由があることも事実である。

したがって、職人の技術は人と人との関わりからも変化していくのであるが、それ以上に原材料や製品そのものに大きな影響を受けるため、それらの面において外的な要因、つまり異業種と連鎖的な反応を引き起こすと考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

- ① 小池淳一「国産万年筆研究の課題」, 国立歴史民俗博物館研究報告, 査読有, 170 集, 2012 年, 1-18 頁
- ② 小池淳一「地方都市における万年筆の製造・開発・販売—甲府ブラザー万年筆の場合—」, 史潮, 査読有, 新 70 号, 2011 年, 38-52 頁
- ③ 青木隆浩「近代の酒造技術—東京市場をめぐる品質競争—」, 歴史研究の最前線, 査読無, vol.13 号, 2011 年, 47-85 頁
- ④ 青木隆浩「故坂口謹一郎氏収集資料とその利用について」, 酒史研究, 査読無, 25 号, 2010 年, 13-18 頁

[学会発表] (計 2 件)

- ① 青木隆浩「平成の酒造り」, 歴博映像フォーラム 5, 2010 年 9 月 4 日, 新宿明治安田生命ホール
- ② 小池淳一「筆記の近代誌—万年筆をめぐる人びと—」, 歴博映像フォーラム 4, 2009 年 12 月 5 日, 新宿明治安田生命ホール

[図書] (計 2 件)

- ①青木隆浩「平成の酒造り 製造編」, 民俗研究映像, DVD, カラー, 88分, 2010年
- ②青木隆浩「平成の酒造り 継承・革新編」, 民俗研究映像, DVD, カラー, 88分, 2010年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

青木 隆浩 (AOKI TAKAHIRO)
国立歴史民俗博物館・研究部・准教授
研究者番号：70353373

(2) 研究分担者

小池 淳一 (KOIKE JUN-ICHI)
国立歴史民俗博物館・研究部・教授
研究者番号：60241542